

會 報

昭和22年1月

昭和二十二年一月二十七日印刷
昭和二十二年一月二十八日發行

兵庫縣川邊郡寶塚御殿山
印刷所 大倉正文
大阪市旭區新森小宮中二丁目九四
印刷所 宏榮社印刷所
兵庫縣川邊郡寶塚御殿山
大倉正文方
發行所 近畿甲蟲同好會

VOL. II. NO. 1. TRANS. KINKI COLEOPT. SOC. JAN. 1947.

Agrilus cyaneoniger E. SAUNDERS (クロ ナガタマムシ)の分布に就いて

黒 澤 良 彦

Agrilus cyaneoniger E. SAUNDERS, 1873(クロナガタマムシ)は北海道, 本州, 四國, 九州の各地に産し對馬及南滿洲からも記録されて居る。私は次に私の知り得た本種並びに其の變種 var. *cupreoviridis* LEWIS, 1893 の分布に就いての若干の知見を記してみた。

(1) 一新分布の記録

私は曾つて鈴木孝太郎氏の北支那山西省に於ける御採集品を拜見する機會を得たが、その中に一頭本種と同定すべき標本を見出したので茲に中國山西省を本種の新分布地として報告する。

Agrilus cyaneoniger E. SAUNDERS, 1873. クロナガタマムシ
Jour. Linn. Soc. Zool., London, XI, p. 515 (1873)

産地: 北支那山西省中條山脈, (1雄, 10, VI. 1941, 鈴木孝太郎採集),

分布: 日本(北海道, 本州, 四國, 九州, 對馬), 朝鮮, 滿洲, 北支那。

日本産の *A. cyaneoniger* の原型に比較すると翅端の圓味が著しく強く、且つその幅が甚しく廣い點を異にするが、其他の點に於いては全く原型に一致する。標本が雌一頭だけではあるが、上記の差異は敢て亞種として區別すべき必要もあるまいと思ふ。鈴木氏は本種をカシハ(?) *Quercus dentata* THUNB. の類の葉上に發見された由である。

(2) var *cupreoviridis* LEWIS, 1893 の分布に就いて

LEWIS は本變種の産地として單に“northern parts of Japan” とのみ記して明確な地名を擧げてない。然しその記載の“The head and thorax are bright and coppery, and the elytra green”に適合する個体は東北地方に最も多く見出され、私の郷里山形

縣に於ては殆ど全部が此の變種で原型に相當するものは私は十數年間に唯の一頭を得たに過ぎない。然し之が更に北方の北海道産の個体になると、前胸背板は著しくその赤味を増し美麗な金赤色となつて來るが、翅鞘の色は逆に綠色味が著しく減退し、黒味がかつて *A. pseudimitans* MIWA et CHUJO, 1940 の記載に一致する個体が多くなつて來る。因みに *pseudimitans* の *cyaneoniger* との相違として挙げられてある諸點は後者、即ち本種の間にも多少の個體變異こそあれ共通するものばかりで、その相違として残るものは僅かにその色彩の點に於いてのみであるが、之も判然と區別出来るものではなく漸次 *var. cupreoviridis* へ移行して居る。依つて私は *pseudimitans* を本種の、*var. cupreoviridis* よりも更に寒地性の一變種と見做したい。此の *pseudimitans* 型は北海道に最も多く見出されるが、その原産地が日光である様に、本州でも高所に所々に産し、曾つて矢野文彦、竹中英雄兩氏が伯耆大山から記録された *var. cupreoviridis* も此の *pseudimitans* 型である。又九州帝國大學農學部昆蟲學教室所藏の江崎悌三先生及び藤野政雄氏御採集の對馬産の本種(3雄雄, 2雌雌, 26.29. V. 1930) 及び白水隆氏御採集の同島産 1雌(8. VI. 1941) も全部此の *pseudimitans* 型と見做さるべき標本であつた。更に以前澤田玄正氏より戴いた北鮮産(1雄, 咸鏡北道宋乙, 4. VII, 1941, 澤田玄正氏採集) の *Agrilus* の一種も僅かな差異はあるが、此の *pseudimitans* 型と同定すべき個體であつた。朝鮮からの本種、*cyaneoniger* の記録は私の知る範圍内では全く見當らないから、多分之が最初の記録だらふと思ふ。尙南滿洲からの記録は唯クロナガタマムシとあるだけで何れの型か判然としない。

本種を整理すれば以下の様になる。

Agrilus cyaneoniger E. SAUNDERS, 1873 クロナガタマムシ

Agrilus cyaneoniger E. SAUNDERS, Journ. Linn. Soc. Zool., London, XI, p. 515 (1873)

分布: 日本(本州, 四國, 九州), 南滿洲(?), 北支那(新記録)

var. Cupreoviridis LEWIS, 1893

Agrilus cyaneoniger E. SAUNDERS *var. cupreoviridis* LEWIS, Journ. Linn. Soc. Zool., London, XXIV, p. 332 (1893)

分布: 日本(北海道南部, 本州中北部)

var. pseudimitans MIWA et CHUJO, 1940

Agrilus pseudimitans MIWA et CHUJO, Nippon no Kochu, III, pp. 54, 60-61, pl. VII, fig. 5(1940)

分布: 日本(北海道, 本州, 對馬), 朝鮮(新記録)

尙最後に常々御指導御鞭撻を賜り居る江崎悌三, 安松京三兩先生を始め標本の御惠與, 御貸與を賜つた白水隆, 鈴木孝太郎, 澤田玄正及び矢野文彦諸氏に深甚の謝意を表する次第である。

(1946年4月8日)

- 1) 名和昆蟲研究所分布調査部, 對馬産昆蟲(8); 昆蟲世界, X, p. 338 (1906)
- 2) 名和梅吉, 滿洲産昆蟲に就いて; 昆蟲世界, X, p. 217 (1906) 菊池行道, 滿洲の甲蟲〔滿洲昆蟲雜記〕; 昆蟲界, II, pp. 641~643 (1934)
- 3) G. Lewis, F. L. S., On the Buprestidae of Japan; Journ. Linn. Soc. Zool., London, XXIV, p.332 (1893)
- 4) 三輪勇四郎, 中條道夫, 本邦産タマムシ科の新種及稀種圖説, 日本の甲蟲, III, pp. 54, 60-61, pl. vii, fig. 5 (1940)
- 5) 矢野文彦, 竹中英雄, 大阪府及其の附近に於けるタマムシ科の分布, 昆蟲界, VII, pp. 579-588 (1939)
- 6) 私は矢野文彦氏の御厚意に依り此の記録に用ひられた標本(1雌)を實見する事が出来た。

キンケトラカミキリを能勢に採る

後 藤 光 男

Clytus auripilis BATES は關西附近では大阪府下箕面公園で採集されてゐるに過ぎないが私は1943年6月27日能勢妙見初谷(大阪府豊能郡吉川村)にて、薪上より採集した、北方系要素の一種である。

Cicindera ovipennis BATES マガタマハンメウの多産地

横 田 榮 三 郎

新潟縣西蒲原郡峰岡村(角田山麓)には5月頃より山地一帯に本種が大發生するのが見られ、甲蟲に全然知識のない専ら蝶のみに趣味を有する自分でも、思はず注意せざるを得ない程の發生なので一應報告します。

日本産 *Psilocladus* 屬のホタルに就て*

中 根 猛 彦

(名古屋帝國大學理學部生物學教室)

On the Japanese *Psilocladus* (Col. Lampyridae).

Takehiko NAKANE.

(昭和21年12月30日受領)

私は少し前についでがあつてホタル類の種名を調べてみたことがあるがその際にムネクリイロボタルと稱するものの色や形がいかにホタルモドキ科のヒメホタルモドキに似てゐることを感じたので、その後兩者の原記載を検討し、標本を調査した結果、この別科の兩種名が實は同一種を指すことを認めるに到つた。このことが今迄見逃されて來たのは別科として扱はれてゐたことにもよるが、同時に従來ホタル類がとかく専門外の人々によつて調査されたことによると思はれる。ホタルとしての學名は *Psilocladus variolosus* Em. Olivier, 1902、ホタルモドキとしてのそれは *Cyphonocerus ruficollis* Kiesenwetter, 1879 であつて、前者の屬は 1837 年に設定され、後者は新屬新種として記載されたものである。私は *Genera Insectorum* によつて *Psilocladus* の特徴を知ることが出來たが、それは略ムネクリイロボタルを屬せしめうるものと考へられた。したがつて今後この種の學名としては *Psilocladus ruficollis* (Kiesenwetter) が用ひられるべきであり、更に Lewis (1895) によつて記載された *C. marginatus* も同様に *Psilocladus* に屬すべきものと思はれる。この屬からは尙 *P. Harmandi* Em. Olivier, 1903 が日本産として知られてゐるが、岡田要先生の、模式標本を見られての記事によれば、印度産である由なので、一應日本のフアウナから除外することにした。以下この機會に日本産の兩種に就て簡単に紹介しておくことにする。

處でこの甲蟲を何れの科に屬させるかが問題になるが Fowler の著書によると兩科は科としては獨立し得ないとして大きく *Cantharidae* の中に包含して亞科として扱はれ、兩亞科の差異は次の點に歸する様で、この點からはホタルと考へなければならぬ。

1. 觸角は頭部背面、又は前頭の突起の基に付き互に近接する Lampyrinae
 2. 觸角は前頭の側部、眼の前方に附く Drilinae
- 又、Reitter の *Fauna Germanica* でも大體同様に、*Drilidae* の觸角が相離れて附

※本報文を草するに當つて懇切な御指示を賜つた佐藤忠雄先生に深謝の意を表する。

1) 本書閱覽に際し便宜を與へられた京大農學部昆蟲學研究室の内田俊郎、安江安宣兩氏に感謝する。

くこと、更に頭部が突出してゐること、轉節が大きいこと、雌が幼蟲態であること等をあげて居り、舊北系のものを對象にしてゐるとは云へ、この種をホタル科に屬さしめることを妥當と考へさせる。

Genus **PSILOCLADUS** Blanchard (Lamprocerinae)

Psilocladus Blanchard, Voy. d'Orb. Ent. 1837, p. 122; Ern. Olivier, Gen. Ins. Fasc. 53, Lampyridae, 1907, p. 11; ---, Col. Cat. Pars 9, Lampyridae, 1910, p. 8.

Cladoceras Kirsch, Berl. Ent. Zeits. IX, 1865, p. 68.

Drilolampadius Gorham, Biol. Centr. Amer, Col. Malac. 1881, p. 33.

Cyphonocerus Kiesenwetter, Deutsche Ent. Zeits. XXIII, 1879, p. 311; Ern. Olivier, Col. Cat. Pars 10, Rhagophthalmidae, Drilidae, 1910, p. 8.

小腮鬚は丈夫で末端節は略卵形で太い。觸角は11節で毛を密生する。第1節は大きくて稍弧状をなし、第2節は小さく、第3—10節は略同じで各の基から同大の2分枝を出し、長く眞直で毛に被はれ、漸次長く又太まつて居り、末端節は絲狀。前胸背は半圓形で中央に溝を有し、背部隆まり、後角は通常鋭く尖り後方へ伸長する。附節の末端節は殆ど完全に前節の葉片から出てゐる。發光器は發達が悪い。7腹節があり、雄の尾節は圓く、腹面末端節は彎入する。肛門部は大きく長い。雌の觸角分枝は短く、觸角節よりも長くない。腹面の末端節は三角で先端は切れ込む。

分布：中・南米、印度、日本。

日本産の種の檢索表

- 1(2) 體は黒褐で前胸背は橙褐色、小楯板は褐色乃至赤褐色。雄の觸角分枝は精々觸角節の1倍半程度の長さである。……………**ruficollis** Kiesenwetter
- 2(1) 體は暗褐で前胸背と翅鞘の縁は赤褐色。雄の觸角分枝は長くて前種の略2倍の長さがある……………**marginatus** Lewis

Psilocladus ruficollis (Kiesenwetter)

Cyphonocerus ruficollis, Kiesw., Deutsche Ent. Zeits. XXIII, 1879, p. 312; Lewis, Ann. Mag. Nat. Hist. (6) XVI, 1895, p. 121, pl. VI, f. 7; Ern. Olivier, Col. Cat. Pars 10, Rhagophthalmidae, Drilidae, 1910, p. 8; 三輪、日本甲蟲分類學 1938, 95頁 圖(94頁)〔ヒメホタルモドキ〕。

Psilocladus variolosus, Ern. Olivier, Bull. Mus. Hist. Nat. Paris, VIII, 1902, p. 188; ---, Gen. Ins. Fasc. 53, Lampyridae, 1907, p. 12; ---, Col. Cat. Pars 9, Lampyridae, 1910, p. 9; 岡田要、動物學雜誌 43, 1931, P. 142; 神田、ホタル、1935, 14及び133—137頁, 第VI圖版第3圖, 第43—46圖〔ムネクワイロボタル〕; 挾間、發光動物 1943, 119—120頁, 第4圖。(n. syn.)

黒褐色で光澤稍鈍く、前胸背は橙褐色、密に點刻を裝ふ。頭部は黒く、粗點刻を稍不均様に具へ、前頭の基は幅廣く平たく凹み、前方は突出し稍隆まり、中央に縦

がある。觸角は黒い。前胸背は長さの2倍の幅があり、前方は側方より圓弧狀に圓まり、基部は軽く3波狀をなす。後角は斜の隆線を具へ、後方へ突出し尖つてゐる。強く密に點刻され粗造、中央は縦に幅廣く且深く溝をなす。背部兩側は膨隆し前方及び側縁は平たく、側部と基部は凹んでゐる。小楯板は赤褐—褐色、先端は略切斷狀。上翅は僅かに後方へ擴がり前胸背より少しく幅廣く、約4倍の長さあり、軽く一様に隆まり、稍皺狀に點刻され、3條の弱い縦の隆線を具へる。翅端は圓まる。腹部は黒く、先端は黃褐色、雄の次末端節の先は中央が三角に彎入し、雌では單純でその前節は幅廣く切斷狀をなす。肢は褐色で部分的に淡色。體長：6—8mm。分布：日本（本州、九州）。

Psilocladus marginatus (Lewis)

Cyphonocerus marginatus, Lewis, Ann. Mag. Nat. Hist. (6) XVI, 1895, p. 115

極めてよへ前種に似るが、暗褐色で前胸背と上翅（基部を除く）は赤褐の縁を有する。前胸背は更に完全に弧狀を呈し、後角部の斜の隆線はより著しく、赤色であり、雄の觸角分枝は前種の約2倍の長さがある。體長：7.5mm 分布：日本（九州：肥後球磨） [G. Lewis による]

Psilocladus Harmandi Ern. Olivier

Psilocladus Harmandi, Ern. Olivier, Bull. Mus. Hist. Nat. Paris, IX, 1903, p. 19; ----, Gen. Ins. Fasc. 53, Lampyridae, 1907, p. 12; ----, Col. Cat. Paris 9, Lampyridae, 1910, p. 9.

長形で褐色、前胸・小楯板・上翅は赤褐。前胸は横位で前方挟まり圓まつて居り、基部は直線切斷狀、密に皺狀に點刻され、中央に縦溝を有する。

小楯板は鈍三角形で點刻される。上翅は密に皺狀に點刻され弱い3條の縦隆線を具へる。體長6mm [Ern. Olivier による] 分布：印度（日本よりの記録は誤）。

参 考 文 献

- Kirsch, Th. : Beitrage zur Kaferfauna von Bogota, Berl. Ent. Zeitschr. IX, 1865.
Kiesenwetter, H. : Coleoptera Japoniae collecta a Domino Lewis et aliis. Deutsche Ent. Zeitschr. XXIII, 1879.
Lewis, G. : On the Dascillidae and Malacoderm Coleoptera of Japan. Ann. Mag. Nat. Hist. (6) XVI, 1895.
Olivier, M. Ern. : Coleopteres Lampyrides recueillis aux environ de Tokio (Japon). Bull. Mus. Hist. Nat. Paris, 1902.

2) Ern. Olivier の Col. Cat. Drilidae の中には本種名が載つてゐない。恐らく書き落としか見落しだと思はれる。

-----: Coléoptères Lampyrides captures a Dardjilling. Bull. Mus, Hist. Nat. Paris, 1903.

-----: Genera Insectorum. dirigés par P. Wytzman, Fasc. 53. Coleoptera. Fam. Lampyridae. 1907.

-----; Coleopterorum Catalogus auspiciis et auxilio W. Junk, editus a S. Schenckling. Pars 9 Lampyridae. 1910; Pars 10 Rhagophthalmidae, Drilidae. 1910.

Reitter, Edm. Fauna Germanica. Die Käfer des Deutschen Reiches. III Bd. 1911.

Fowler, W.:W. The Fauna of British India, including Ceylon and Burma. Coleoptera. General introduction and Cicindelidae and Paussidae. 1912.

岡田要: 本邦産蠶類學名の考察. 動物學雜誌 43, 1931.

神田左京: ホタル. 1935.

三輪勇四郎: 日本甲蟲分類學. 1938.

挾間文一: 發光動物. 1943.

シワナガキマハリの學名

中 根 猛 彦

最近、大澤省三君が和歌山縣新宮附近で採集されたシワナガキマハリを持參されたので種名を調べてみる機會を得たが、その結果、從來圖鑑にあらはれた *Strongylium schencklingi* Gebien (Arch. f. Naturg. 79 Jg. 1913 (1914), A, 9, P 48) に當るものは全く別の 13mm. 内外の小形種であつて、シワナガキマハリは *S. japonum* Marscul (Ann. Soc. Ent France, 1876, p. 320) に當るものであることを知つた。一方、三輪博士は臺灣産のものを *S. sinuati* Penne Miwa (Zool. Mag. Tokyo, 51, 1939 p. 414, f. 4) として記載されて居り、*japonum* と比べて “much larger body, more bright colour and relatively distinct elytral sculpture.” を持ち、體長が 20mm をこえること (21—25mm) を示された。しかし日本産のものも 20mm をこえる様であるし (新宮産 21mm, 加藤正世氏が四國の黒尊で採集されたものは寫眞によると 21.5mm であり、一方臺灣産でも加藤氏又は平山氏の圖鑑より算定すると 20mm 位で全然變らない)、上翅の條刻等は多分に相對的なものである故、私としては精々亞種として残しうるものではなからうかと考へてゐる。以上シワナガキマハリの學名と本州にも分布する事實をのべ、臺灣産のそれに言及した。尙、神谷・安立兩氏が甲蟲圖譜に示されたウスイロゴミムシダマシは全然 *japonum* とはちがつたものである。

甲蟲 2 種の觸角畸型に就いて

東 勝 公

筆者は本小文に於いて最近得た甲蟲 2 種の觸角畸型に就いて簡単に記載して置く、稿を草するに當り種々御教示に與つた大倉正文氏に深甚の謝意を表する。

1) *Lypros sinensis* Marseul ヒゲブトゴミム
シダマシ [fig. 1]、

畸型部：左觸角

畸型狀態：畸型觸角第 3 節は右觸角同節に比し少しく短かく第 7 節は稍小である、第 8 節は極度に小且つ扁平にして第 7 節の左上側に附着し第 9, 10 節は脱落し第 11 節は右觸角同節の約半分の長さを持つ、[fig. 参照]

全長：15mm [正常觸角は約 3mm]

採集日：5-III-1946 [石川縣能美郡山上村上開發]

2) *Allecula fuliginosa* Maklin オホクチキム
シ

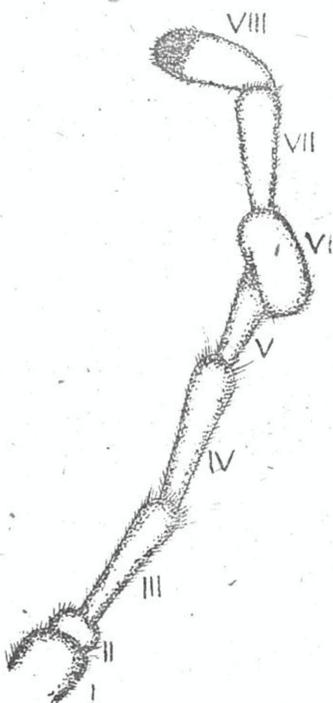
畸型部：右觸角

畸型狀態：第 1, 2, 3, 4 節は何等正常觸角と異ならないが第 5 節の先端に第 6 節の中央部があり且つ第 5, 6 節共正常觸角に比し稍短かく太い。第 7 節は稍太い他異常を認められないが第 8 節は恰かも末節の如く稍太く先端黑色を帯ぶ。第 9, 10, 11 節は之を缺く。

全長：5.5mm [正常觸角は 10mm]

採集日：24-15-1946 [石川縣能美郡山上村辰口]

[附記] 1)は雑木林中の蟲エイ(多分ナライガフシ)上より2)は稍朽ちかけた杉の樹皮下に多數と越冬中を採集したのである何れも筆者保存中。



—17-VI-1946記—